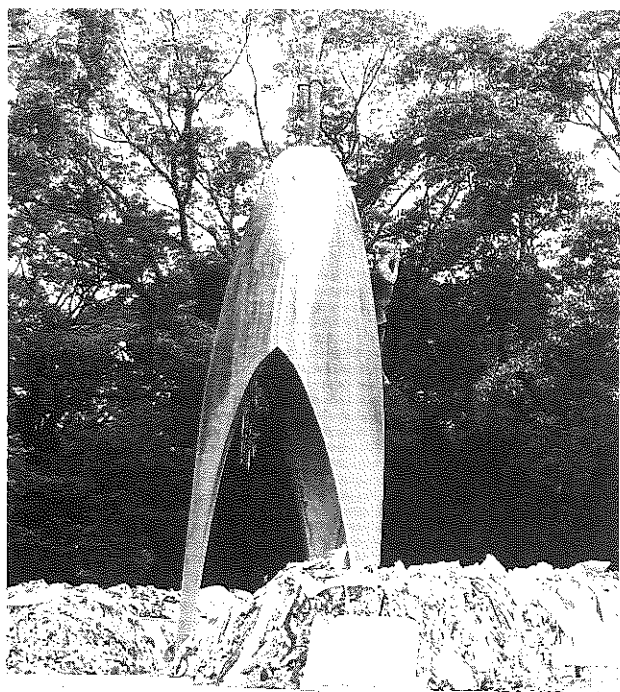


神田山やすらぎ園

第二特別養護



原爆の子の像

電車の中で

梶山アイ（八四才）

被爆地……横川町（爆心地より二km）・屋内（電車）

当時の急性症状……なし

家族の死亡……なし

被爆前の家族構成と当時の生活

主人は一〇年前、悪性の風邪が元で死亡、一人娘は奈良に嫁ぎ、私は榎町一三番地で一人暮らしをしていました。

兄の経営する印刷工場は、従業員一〇〇名ほどでかなり規模も大きく、私も従業員の一人として働いていました。強制建物疎開が始まり、兄の工場も縮小され祇園へ疎開いたしました。

被爆時の状況

榎町の自宅より市内電車で横川駅まで行き、郊外線可部行の電車に乗り換えたところ、ピカッと異様な閃光に襲われ、私は瞬間両手で目を覆いました。それは一瞬の出来事で何が何だか解らないま

ま呆然としているうちに電車は発車、気がつくとも祇園駅に着いていました。

幸いにも工場の建物の破損はありませんでしたが、内部はガラスの破片や印刷用の活字が床一面に散乱し、足の踏み場もないほど雑然としていました。

足を引きずった人たちが口々に何かを叫び、あるいは放心状態でぞろぞろと避難して来ました。市内はまるで火の海になっていると聞かされました。

被爆後の行動と生活

左官町に居住する母と姉夫婦の安否が気ばかりで焼跡を歩き廻りました。周囲はまるで焼野原となり、見るも無残な瓦礫の街となり、路上では衣服が焼けちぎれ男女の区別もつかない裸の死体が散乱し、負傷者の水を求める小さな呻き声を耳にしたがどうすることもできず、後ろ髪を引かれる思いで立ち去るより仕方がありませんでした。まるでこの世の生き地獄だったと、今も強く、深く、私の脳裏に焼きついていきます。

八月の日照りの猛暑の中、遺体を探し求めて一週間。ある日の午後、半身白骨の無残な焼死体となり、変わり果てた母と姉夫婦の遺体と対面。むなしさをこらえ質素ながら菩提寺である寺町の元成寺へ葬りました。

住居は工場の隣の散髪屋の離れ座敷を借りました。食糧難はいよいよ、厳しく僅かばかりの配給の南瓜やさつまいも、馬鈴薯で飢をしのぎ、田舎へ買い出しに行った隣人からの野菜を譲り受けることもありました。時折、手に入る一切れの魚の美味しかったこと、今にしても忘れることができません。

ホーム入所後の状況

甥が兄の後継者となり、三篠小学校前に小規模ながらも工場も新設、操業開始したものの僅か一年半で営業不振となり止むなく閉鎖となったため、過去の経験を生かし、同系統の印刷工場で働くことになりました。

昭和四五年、打越町に長年の願望であった、小さいながらも我家を自力で建てることができました。昭和五五年、腸捻転を起こし、河石病院に入院、手術を受け二年間闘病生活を送っていました。甥が退院後の一人暮らしを気づかい、やすらぎ園へ入所手続きをしてくれましたが、私はあまり気が乗らず困らせたものです。今では、愛用の歩行器にすぎり何不自由なく、何もかも一つ一つ感謝の日暮らしをさせていただいております。

平和学習のお役に立てば

吉岡 タマコ（八三才）

被爆地……的場町（爆心地より二km）・屋外
当時の急性症状……下痢・発熱・脱毛・歯ぐきの出血・吐気

家族の死亡……なし

被爆前の家族構成と当時の生活

当時の家族は主人、長男（四才）、長女（二才）、次女（胎内）、私の四人で生活をしていました。現在、皆、健在です。

主人は、東芝商事に勤務しており、生活は比較的安定していました。

妊娠中（一〇ヶ月目）の私は、定期検診のため通院していました。

被爆時の状況

山根町に住んでおり、その日は定期検診日にあたっていたため、産場の産婦人科病院に着いた時、ピカッと閃光が走り、一瞬空が暗くなりました。目の前の建物が倒れ、ほうほうで火の手があがりました。火の海の中を子どもの手を引いて山根町まで帰ってみると、家は破壊して延焼していました。主人は山根町地区の副会長をしており、その当日は山根町の勤労奉仕に出かけていました。しばらくして帰って来た主人は、足に軽い怪我をしていました。

家の倒れた現場を見て、なすすべもないまま高天が原まで行き、一家四人蚊帳の中で一夜を過ごしました。

被爆後の行動と生活

原爆投下の翌日、嫁ぎ先の白木町の姉の所へ御用商人の馬車で行き、身をよせました。着いてまもなく、産気づいたので産婆に見てもらいましたが異常もなく、昭和二〇年八月三十一日、無事女兒を出産しました。

出産した喜びはひとしおで家族皆で喜んだことを今でも覚えています。

昭和二〇年一〇月頃まで白木町で暮らし、再び山根町に帰ると地区会長さんが家を探してあげると言われ、当時五千元で申し込めば、バラックのような家を建てることができました。

ホーム入所前後の状況

昭和五三年、糖尿病、背椎症で入院。昭和六三年五月退院とともにホームに入所。当分の間、ホームで生活しましたが高血圧症不定愁訴等のため舟入院病院に六ヶ月間入院生活を送り、状態が落ち着いたので退院しました。月日が経つにつれホーム生活にもなれ、他の入所者とも友達になり、行事にも積極的とはいえませんが参加するようになりました。

中でも、修学旅行の生徒たちに原爆体験記の話をすることを楽しみにして、平和学習の役に立っています。

勤勞奉仕で

山手節子（五八才）

被爆地……楠木町（爆心地より一・五km）・屋内

当時の急性症状……下痢

家族の死亡……なし

被爆前の家族構成と当時の生活

横川二丁目で父透、母芳子との間に男四人、女三人中、次女として生まれました。

父は自転車屋を営みながら急配の車で氷を運ぶ仕事もしていました。母は仕立物等をして生活していました。姉と私は学徒動員に行っていました。長男と次男は小学生で学童疎開に行っていました。

被爆時の状況

高等科一年生で勤勞奉仕のため楠木町にある軍需工場の田村工場に行っていました。物凄い閃光と爆音に驚き外に出ると、火の手があがっていました。自宅の横川に帰ろうとしたが、火の海で行けず、みんなについて大州小学校に避難しました。次から次に火傷した人が来ます。一人で淋しく寝られな

かった。翌日、安佐町飯室の叔父の家に行ったら、母や姉、弟も来ていました。母の話によると横川の家も倒壊しみんな下敷きになりましたが、近所の人たちに助けられ、家の中だったので火傷はせず、弟は頭にガラスがたくさん立っていたそうです。父は車で氷を運んで出たまま帰らないので親戚の人たちが捜すと、千田町で被爆、半身火傷をして舟入病院に運ばれていました。

被爆後の行動と生活

父が少し動けるようになったので、宮島口の叔母の家に行き厄介になりました。

半年ぐらいいして父も大分良くなったので、もとの家があった横川に家を建てることになり、山から木を切りだし、親類の援助で父はまた自転車屋、母は仕立物をし、姉は女子商学校を卒業して銀行に勤め、私は通信局に入社し電話交換手をして働きました。

私が一八才の時、結婚しました。

ホーム入所前後の状況

長女が高校生のとき、夫と離婚し、子ども二人を引き取りました。二人の娘も結婚し、一人暮らしで中電病院の厨房に勤務していましたが、物忘れがひどくなり、平成元年一月広島市民病院の精神科に入院し、アルツハイマー型痴呆と診断されました。自宅での一人暮らしは難しいため、平成元年二月、長崎病院に転院となりました。痴呆の状態は、ほとんど他人に迷惑をかけることはありませんが、物忘れがひどく、ときおり訳のわからない事を言い始めることがあります。高血圧症と不眠のため、

精神安定剤を服用しています。ホーム入所の方が入院生活より望ましいと希望し入所となりました。入所し気分的にゆったりできるようになりました。時には頭が痛く、目まいがすることもあります。が、感謝の日々であります。

左目を失明して

三宅 寿子（六五才）

被爆地……牛田町（爆心地より二・三km）・屋内

当時の急性症状……ガラスで負傷

家族の死亡……なし

被爆前の家族構成と当時の生活

牛田町神田区一二九五番地で舅、姑、夫と私の四人家族。夫は軍人で兵器廠に勤めていました。舅は、住宅と隣あつて木工工場があり、一〇人分の仕事ができる良い機械が何台かあったので、市から学校の机、椅子の注文を受けたときだけ一人で製作していました。

私は、七月一二日に腎盂炎の高熱のため四〇日早く長男が生まれましたが、心臓の弱かった長男は

一八日に亡くなり、その後寝たり起きたりの生活でした。

被爆時の状況

家には夫の両親と私がありました。私は二〇才で初産後二五日目でした。生まれた長男が一週間で亡くなり、寝たり起きたりの毎日でした。座って居間から裏庭の方を見ていたら、大きな音とともに右手の浴室の窓ガラスに大きなフラッシュのような閃光を見ました。自分の家に爆弾が落ちたと思い、姑と防空壕に入りました。左顔面から濃い血が流れてきました。何によって負傷したのか分かりません。防空壕を出て姑が「まあ、寿子さんは目を怪我してから」……と抱きついて泣かれました。舅は赤チンをたっぷりつけた脱脂綿で左顔面を覆い、三角巾で巻いてくれました。牛田の川土手に避難したとき眼の痛みがひどくなり、手鏡で顔を見ると瞼は血のりで覆われ、目を開けても赤く何も見えませんでした。軍の兵器廠に勤めていた夫が私を自転車に乗せ兵器廠の仮収容所に行き、そこで顔を縫合しました。医師の手許が暗く、縫われた糸は翌朝結ばれました。

被爆後の行動と生活

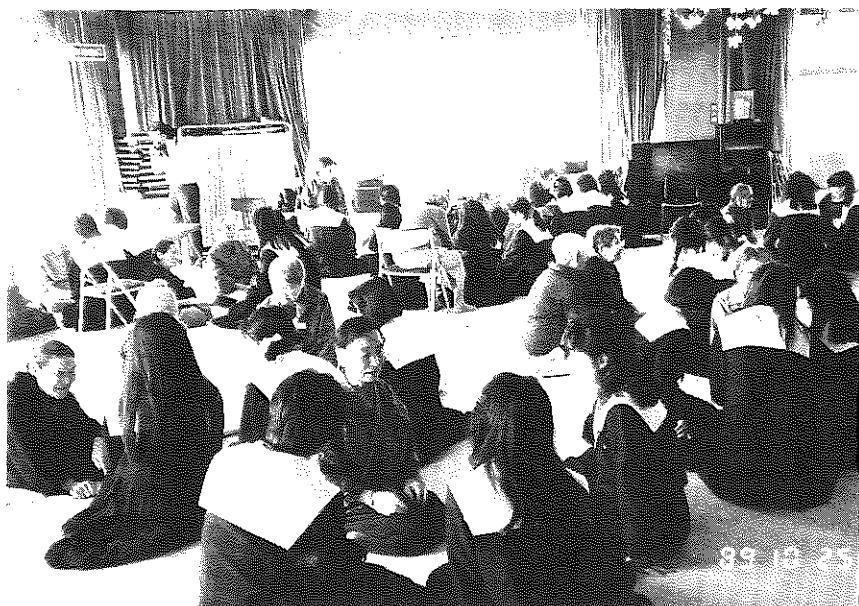
痛みのひどい眼はどうしようもありません。顔面を氷で冷やしてくれました。左目の傷は化膿せず、眼は失明し、水晶体性ぶどう膜炎は黒かったのが白く覆われてから痛みを感じなくなりました。バラックに住み、一〇月頃より背中が痛くなり神経痛と診断され、翌年一〇月には次男が生まれ、一月に胸椎カリエス中期と判明。それでも八ヶ月まで仰臥したまま母乳を飲ませました。市から粉ミル

クの配給を受け、子どもは嫁ぎ先の家におり、私は実家で療養しました。次男が小学校一年生の時に、協議離婚をしました。体がだるく足に大小の紫斑がよく出て、出血性素因の原爆症と認定されました。

昭和三四年一二月より西条療養所でギブスに仰臥し絶対安静の生活となり、七年間その状態が続き、コルセットをつけて起きられるようになってからも、その間、数回の手術にて度々仰臥生活を繰り返しました。排膿、発熱、心不全、呼吸不全、腎不全の余病も加わり、苦痛の連続でした。一八年余、母のもとに松葉杖をついて外泊しました。翌朝廊下で転び、救急車で療養所に戻り、背骨の骨折で肋骨の下部より麻痺してしまいました。手術後、車椅子生活ができるようになって、昭和五四年七月に退院しました。

ホーム入所前後の状況

二〇年近い療養生活の後、母と兄夫婦の住む生家に退院し生活をしました。手の力で手摺を持つてど



うにか立つことはできても歩行は難しく、車椅子生活ながら、車椅子用トイレ、風呂の設備をするとは難しく、兄嫁の負担は大きく大変お世話になりました。老母が昭和六一年二月に九三才で亡くなり、長い間心配ばかりかけた母の傍で七年近く共に暮らす時を与えられ、喜んでもらえたことは大きな感謝でした。昭和六二年一〇月にやすらぎ園に入所し、車椅子用トイレに自由に気兼ねなく行かれるようになり、機械入浴で何年振りに温かい湯に浸る喜びを味わい、山の上の居室は明るく静かで車椅子で行動するスペースは十分にあり、必要に応じて職員の方々の暖かい助けをいただけるし、すべてに感謝です。今日という日を大切に、自分でできることはできる限りするようにしながら、神様から与えられている命と時と力を賢く使いさせていただきたいのです。

背中 の痛みをこらえて

有馬 トキヨ（八七才）

被 爆 地……楠木町（爆心地より一・六km）・屋内

当時の急性症状……打撲・ガラスで負傷・下痢・発熱・脱毛・吐気
家族の死亡……次女

被爆前の家族構成と当時の生活

楠木一丁目で夫、子ども六人、義理の子ども五人の面倒を見ていたので大家族でした。

主人は建築業を営んでいて、仕事も順調にいつていましたので、とても忙しい毎日を送り、幸福な生活でした。

次女は電話局に勤務し、三女は県庁に勤め、他の子どもは学生でした。

被爆時の状況

これから銀行に出かけようと思って身支度をしている時に、ピカーッと来たと思ったら、あつという間に爆風とともに家が崩れ落ちて下敷きとなりました。

主人は横川方面に仕事に行っていましたが一目散に家に帰って来ました。隣の香川ゴム工場から火がついたときとは思いました。倒れたばかりの家には火がつき、主人が必死で私たちを助けてくれました。

次女は電話局に勤め焼死しました。三女は県庁に勤めに行く途中で忘れ物を取りに帰り助かりました。義理の子一人が近くの川へ泳ぎに行っていました。

常日頃、避難場所として安小学校と聞いていたので、背中の方の痛みをこらえながら無我夢中で安小学校にたどり着き一夜を明かしました。

被爆後の行動と生活

翌日、宇賀の方から戸山字丹原の疎開先に落ちつきました。被爆後三日目に、主人は川で泳いでいた子どもを捜しに焼跡を歩いていたら知人に出会い、子どもの居場所を教えてもらいました。子どもは裸で真黒い顔で素足でしたが、そのまま歩いて連れて帰りました。

川で泳いでいたので毒素の水をたくさん飲んでゐるし、日々みんな下痢はするし、徐々に髪の毛も抜け出して丸ぼうずになりました。

大ばこや野草を摘み、体に良いと聞いて取つては炊いて食べさせ自分も食べました。当時はそれがとても良かったと思いました。

生活は百姓のお手伝いや買出し、また開墾して野菜を作り、お陰でお粥も食べることができてありがたかったです。

終戦後、義理の子どもの父親が復員して来たので子どもを手渡しました。田舎の生活を約一〇年くらいして再び広島に土地を買って家を建てました。楠木町にも借家があり裕福な暮らしに入りました。

ホーム入所前後の状況

新居は天満町で始め、借家もあり楽な生活でしたが、原爆時の打撲のせいか四五才頃から患いはじめ、五五才の時、県病院で脊髄腫瘍の手術を受け、後遺症で下肢麻痺が残り、一生懸命でリハビリをして歩けるようになりました。主人七五才で死亡しました。

昭和五七年八月、今度は胃潰瘍の手術をして約三ヶ月入院。昭和六二年一〇月梶川病院へ入院しました。お正月は家で迎えました。が風邪をこじらせ、昭和六三年一月～四月まで吉島病院に入院しました。退院時に月一回の通院指示がありました。たびたびの入退院で、ちょうどそのころ友達に勧められ日蓮宗におすがりました。

次男の家で暮らしていましたが日中家族が勤めて留守なので、足が不自由なため転倒などを心配して知人からも聞いていたホーム入所を希望しました。子どもたちも面会や通院・介助と良くしてくれるので嬉しく思っています。

入所してからはお陰でのんきな毎日と、友達もたくさん出来てとてもありがたいと思い、感謝の日々です。

救助してくれた人の安否が気になる

正木良子（七五才）

被爆地……三川町（爆心地より〇・八km）・屋内

当時の急性症状……脱毛・吐気

家族の死亡……なし

被爆前の家族構成と当時の生活

夫は呉海兵隊に入隊していて、私は当時は病院の賄婦として働きながら一人暮らしでした。両親と兄弟は宮島に居住し、被爆を受けたのは自分一人だけでした。

被爆時の状況

朝食の後片付けをしていたら、窓からピカッと閃光が走り、今まで聞いたことのないような轟音を耳にして、ただごとではないと思い、咄嗟にテーブルの下に潜りました。

外傷はなかったものの、何かで腰部を強打したようです。家は崩壊し、気を失い倒れていたら、裏の風呂屋の人に救い出され駅方面へ二人で夢中で逃げました。その途中全身火傷をした人や、すでに死んでいる人を横目で見ながら、「地獄だ、地獄だ」と二人で呟きながら歩き続けました。

戸坂まで来たときに、軍隊のトラックに自分一人だけ引き上げられ、安小学校の救護所に收容されました。

食事を出されましたが、吐気がきてまったく食べられず、二日間ほど苦しみ続けました。その間にも収容者が続々と死亡していきました。

被爆後の行動と生活

救護所に着いて三日目、精神的にもやっと落ち着き、救護所の人に頼んで宮島の両親を迎えに来て

くれるようにハガキを出してもらいました。

すぐに両親が迎えに来てくれて、宮島で身体も心も休養できましたが、その頃から腰痛がひどくなりました。

宮島で終戦を迎え、昭和二〇年九月、夫が復員し、宮島の借家で二人で暮らし始めました。昭和二一年一二月に長女が誕生し、これから親子三人で暮らせると思っていた矢先に、昭和二二年五月、夫は肝硬変で死亡しました。

幼い長女を両親に預け、自分は広島市内の沢崎産婦人科で炊事婦として働きながら、宮島の両親へ送金を続けました。

娘が四年生になった時、生活も安定して来たので手許に引き取り、同居しました。

ホーム入所前後の状況

段原日出町に娘と二人で暮らしていましたが、同町内に妹夫婦が居住しており、何かと娘の面倒を見てくれました。

娘の結婚後は、沢崎産婦人科に炊事婦として勤め生計を立てていました。

昭和六〇年頃から腰痛がひどくなり、秋山外科へ入院を繰り返すようになり、勤めもやめました。今までの貯えと娘からの援助で生活していましたが、病状も固定して来たため、院長や福祉事務所の人の話を聞いて、ホーム入所を希望しました。

現在は経済的な不安もなく、ホーム内に診療所もあり、病気をしても安心して生活できるので嬉し

く思っています。

現在でも救助してくださった風呂屋の人の安否が気がりです。

すさまじい悪臭が

川崎

力（五六才）

被爆地……仁保町向洋町（爆心地より四・一km）・屋内

当時の急性症状……下痢

家族の死亡……なし

被爆前の家族構成と当時の生活

広島市向洋大原町で父、母、姉、妹と私の五大家族で暮らしていました。父は警察官であり、母は質屋を営んでおり、姉は貯金局に勤めていました。私と妹は庄原方面に学童疎開をしていました。しばらくして身体の状態が悪くなり、私だけ自宅に帰省しました。

被爆時の状況

被爆当時の年齢は一三才。小学校の六年の夏休み、掃除当番のため校庭の掃除をしていると、突然目の前がピカッとして黄色い光が見えました。だれかが写真をとっているのであろうと思っていると、ドカンと音が聞こえ、音と同時に下駄箱が倒れ、窓ガラスが壊れ、ガラスの破片が飛び散り、生徒の中には血を流している者もたくさんいました。突然の出来事のため、今何が起きたのか理解できず、しばらくの間その場にじっとしていましたが、我れに返り素足のまま急ぎ足で家に帰って見ると、ガラスが壊れとび散っている所で母がボーッと放心状態になっていて、その場にすわりこんでいました。

被爆後の行動と生活

家屋は倒れてはいませんでした、とび散ったガラスの破片の後片付けをしました。原爆投下後、しばらく過ぎたころ、校庭に遺体が毎日運ばれ、山のように積まれ、良く焼却できるように松葉を混ぜて火葬される様子は凄まじく、何とも言えない悪臭は、戦後四四年過ぎた現在、脳裏に強く焼き付いています。当時父は警察官で、毎日、被爆者の中で命ある者は病院に運び、すでに死亡している者は火葬場にと被爆者の救済に携わっていました。

姉は貯金局に勤めており、やっとの思いで家路にたどり着いた姿は、真赤に焼きただれた顔、ズルッと剥けた皮膚、その姿を見た時は、一瞬姉であるという事が判明できない状態で、背筋が凍る思いでした。

ホーム入所前後の状況

昭和五六年、吐気、黒色便が頻繁に出るため精密検査を総合病院で受け、治療をすることとしました。昭和五七年頃歩行が難しくなり、微熱が続くため、再び総合病院に受診。結果、カリエスと左腎臓結核と診断、国立広島病院でカリエスと腎臓摘出手術を受けました。リハビリの効果により、車椅子で日常生活ができるまでになりました。

昭和六三年七月ホームに入所しました。ホームの生活も車椅子です。実際に入所してみると、年齢層の相違と話題や会話に乏しく、最初の数ヶ月はとまどいもありました。できるだけ行事やクラブ活動には参加するよう心がけてはいますが、自分と同年輩の友達がいないのがとても寂しく思っています。

空一面異様な閃光が

松 尾 節（八九才）

被 爆 地……南観音町（爆心地より四km）・屋外
当時の急性症状……なし

家族の死亡……なし

被爆前の家族構成と当時の生活

己斐中町二丁目三一番地で母と長女、次女、私の四人家族でした。長女は家で近所の子弟に和裁を教えていました。次女は鈴ヶ峰女学校在学中、学徒動員で軍需工場で働いておりました。私は天満町の市場から食料品を仕入れ荷車を押して家庭の個別販売の行商で一家の生計を立てていましたが、だんだん物資の不足と共に市場も閉鎖され、やむなく南観音の三菱重工業で軍部の仕事をしていました。

被爆時の状況

その日も元氣に出勤、工場の門前で突然ピカッと空一面異様な閃光を見たたん、ドーンと何かが炸裂したような大音響がしました。同時に物凄い爆風で目のバラック建ての家が一斉に将棋倒しになりました。

一瞬、何が何だか解らず、呆然とたたずんでいました。ふと我れにかえり、爆弾が落ちたと思い咄嗟に前の倉庫の中に入ろうとすると、布団を頭からスッポリ被った人に、こっちは危ないから入ってはいけなと注意され、仕事場に行ってみると、やはりガラスの破片や木片が床一面に散乱していました。

被爆後の行動と生活

家族のことが気掛かりで線路伝いに歩いて己斐の我が家にやっとの思いでたどり着きました。途中、黒い雨がパラパラと降り出し頭からすっぱり濡れました。廻りは死の世界といふべきか瓦礫の中に死骸があちこちに転がり、すれ違う人は殆ど傷つき、ボロボロの服装でうつろな表情でふらふらと歩いていました。

我が家は天井に大穴があき、爆風でガラス戸は全部破損しましたが、幸いにして山手であるため、家具類はあまり被害がなく助かりました。食糧は防空壕の中に保存食がかなり貯えてあったので、当分は飢えをしのぐことができました。暫くして、再び荷車を押して田舎から野菜を運び行商を始めました。当時は皆さんから大変喜ばれました。

ホーム入所前後の状況

二人の娘はそれぞれ結婚、幸せな生活を送るようになりました。私は長女と同居していましたが、孫たちの成長とともに家も狭くなり、民生委員のお世話で昭和五六年二月舟入むつみ園特養課に入所、昭和五七年六月やすらぎ園へ移動させていただき、衣食住みたされ、暖かい心のこもった食事をいただき、職員のみな様方のいたれりつくせりの保護を受け、もったいない日々を送らせていただきます。

死んでいく被災者を焼く仕事が続いた

光 寺 恵 眞（八三才）

被 爆 地……宇品町（爆心地より四・〇km）・屋外

当時の急性症状……なし

家族の死亡……なし

被爆前の家族構成と当時の生活

広島市横川町に両親と三人で住んでいました。

被爆当日の朝は、勤務先の糧秣廠のある宇品にいたので直接被爆による障害はありませんでした。

被爆時の状況

糧秣廠に着いて間もなく、ものすごい爆音とともに爆風が起きました。同僚とともに建物の中に入りしばらく様子を見て外に出て見ると、紙屋町付近が見通せるほど、建物はすべてなく、ただ驚くばかりでした。

急に、横川に住む両親の安否が気づかれ、川土手を走って横川に向かいました。家は全焼してい

ましたが、両親とも、軽い外傷をした程度で安心しました。その晩から住む所もなく途方に暮れていたら五日市の寺の知人が訪れ、その寺でしばらく世話になりました。私は勤務先に戻って見ると、そこは被災者の救護所になっていました。

それからは、毎日死んでいく被災者を焼く仕事が続きました。

被爆後の行動と生活

両親は五日市の串道にいましたが、私は宇品の勤務先へ残務整理のため、昭和二〇年一〇月頃まで寮に入り生活していました。

その後、次々と両親が死亡しました。一人になってから、教戒師の補助として中国五県の刑務所などを廻りました。

高齢になり、あまり遠方まで出かけられなくなったので広島に戻り、三篠町の甥、光寺重信の所に身を寄せ、近所で説法を説いて廻っていました。

甥が三篠の寺を継いでくれましたので、法事や葬式等に同行するなどして、生活にはあまり困りませんでした。

ホーム入所前後の状況

昭和六〇年頃から体調が悪くなり、今田外科や駅前病院（名前は憶えていない）で入退院を繰り返していましたが、同年一二月、脳動脈硬化症と診断され、すぐに三篠町の今田病院へ入院しました。

二年ほど入院生活を送り、治療の甲斐あって病状も固定しましたので退院の許可が出ましたが、高齢でもあり、甥の重信宅にも迷惑をかけると思い、自らホーム入所を希望しました。

今は同年代の人たちの中で、何不自由なく暮らすことが出来、幸せに思います。

若い頃から苦勞ばかりして来ましたが、仏教の教えを修得したお蔭で他人を許せる気持ちが今でもあるため、雑居の部屋でも苦痛を感じる事はありません。

今、独りになりたい時は、訓練室で体を動かし、体力を増強できたらと思います。